

〈論文 日本史学〉

近世都市江戸における迷子の保護

岩 橋 清 美

要旨

本稿は、江戸の町における迷子の保護について分析を行ったものである。迷子は捨子と同様に近世後期には主要な都市問題の一つになっていた。それは、捨子に準じ、親類・縁者・養父母が見つかるまで養育しなくてはならず、その費用を町入用から捻出したからである。こうした町の負担を軽減すべく、安政四年（一八五七）、町の有志によって一石橋に迷子石が建立された。これは迷子情報を手軽に広めることができる方法だったため、明治初年にかけて各町に次々と迷子石が建てられることになった。

本稿では迷子石建立をめぐる手続きを分析し、迷子保護に対する町奉行所と町人たちの意識の差異、迷子石の社会的意義について考える。

キーワード

迷子 捨子 江戸町奉行 一石橋 迷子石

はじめに

本論文は、江戸の町における迷子の保護について、迷子石の建立を中心に論じるものである。一八世紀半ば以降、

迷子の増加は、捨子と同様に都市問題の一つになっていた。捨子の保護は生類憐み令を契機に習慣化⁽¹⁾し、捨子を発見した町が保護・養育し、養父母を探し出す仕組みが定着した。⁽²⁾この捨子養育のシステムは、その後、迷子にも適用されるようになり、迷子を発見した町が保護・養育を行い、迷子の父母・親類・縁者あるいは養父母を探すことになった。捨子・迷子の保護・養育に関わる費用は町入用から支出されたため、町々の経済的負担も少なくなかった。このため、捨子・迷子の保護は、地主層にとっては厄介事であったが、その一方で人々の間に捨子・迷子は保護すべきであるという認識も定着させることになったのである。安政四年（一八五七）に建立された一石橋の迷子石を契機に、幕末から明治初年にかけて江戸の各所に迷子石が建てられたこともこうした町人の意識の反映であると考えられる。本稿では、迷子石の建立を通して迷子の情報を広く知らしめ、親類・縁者探しの一助にしようとした町人の動向を分析する。

江戸の迷子石については、これまで、歴史学・民俗学の分野で取り上げられてきた。歴史学では、西山松之助氏・川崎房五郎氏が「一石橋の迷子石設置の経緯とその後の迷子石の広がりについて紹介している。西山氏は、迷子石が寺社の境内等のいわゆる「盛り場」に置かれた点に注目し、「日常の歪んだ社会のなかで、何らかの疎外感に淋しさを持つ人々に特殊な暖かさを感じさせる存在だったのではないか」と述べている。氏は、江戸の行動文化の研究を通して、迷子石を都市化が引き起こした社会問題の象徴と捉えている。⁽³⁾民俗学では、斎藤純氏がフィールドワークと文献調査によって、全国の迷子石の建立地・建立の経緯・碑銘等を明らかにしている。⁽⁴⁾

迷子石の存在は、これまで認識はされていたが、江戸の風物の一つとして語られ、その社会的意義が江戸の都市機能との関係で十分に考えられることはなかったと言える。一九世紀に入って、迷子石が建立されていく背景には、寛政期以降の幕府の封建的社会政策とその影響を受けた江戸町人たちの意識の変化がある。寛政四年（一七九二）に設置された江戸町会所の救済活動には、七〇歳以上または一〇歳以下の独身の困窮者・長病の困窮者・捨子・寡婦・

身体障害者等を対象にする定式救済と飢饉・大火・地震・疫病等の非常時救済があり、とくに天保の飢饉時に最大限にその機能が発揮されたことが明らかにされている。⁽⁵⁾農村部においても寛政期には小児養育・荒地起返といった復興政策が行われており、そのことは、その後の村役人層の困窮者に対する救済活動を促進する契機になったと考えられる。⁽⁶⁾近年の研究において、松平定信が「万人が社会を創り出す、人々参加型社会」を構想していたとの指摘がある。⁽⁷⁾そこでは、町会所の設置は、身分制社会の階層秩序を中心とする「タテの結び目」に、「合力」や「義捐」という言葉で結びつく「ヨコのつながり」を交差させようとした政策と位置づけられている。⁽⁸⁾そして、この見地に立てば、迷子石の設置は、「タテの結び目」と交差した「ヨコのつながり」が、「タテの結び目」ではなしくない社会的弱者の救済の紐帯となっていた社会状況の反映と考えられよう。

ここでは、最初の迷子石である一石橋の迷子石の設立過程とその後の広がり明らかにし、設置を出願した町人の意識、および町奉行所との意識の差異について検討する。その上で江戸の迷子保護の社会的意義について考えてみたい。

一、迷子保護の実態

迷子の保護は、基本的には捨子の保護・養育に準じる形で行われてきた。迷子が発見された場合は、まず、発見場所の町名主が奉行所に届け出を行い、その後、芝口町河岸に迷子の情報を記した立札を設置することが享保一一年（一七二六）に定められていた。⁽⁹⁾その際、問題になるのが保護した子供を迷子とするか、捨子とするかという点であった。子供の成長の度合によっては、両者の区別が難しかったからである。ここでは、まず、迷子の定義を行い、その上で、保護の実態について具体的な事例を通して見ていくことにする。

(1) 迷子の定義

迷子と捨子の区別は、町方だけではなく町奉行所においても判断が難しいことが少なくなかった。幕府が迷子と捨子をどのように区別していたかを示す史料として、明和七年（一七六七）十一月、勘定奉行松平忠郷の問い合わせに対して町奉行牧野成賢が作成した返答書がある。まず、この史料から、幕府の認識を明らかにしておきたい。

迷子之儀⁽¹⁰⁾

右八都て三歳位より以上迷子之取計方に有之候、尤其処より訴出候得ハ大切に養育いたし置、追て貫人有之候ハ、可訴出旨申渡置、貫人有之候節、町役人差添願出候得ハ吟味之上願之通申付候

牧野成賢の返答書では、三歳以上の子供を迷子としている。しかし、これだけでは判断することができないこともあり、その後、文政元年（一八一八）四月、勘定奉行榊原忠之と土屋康直が町奉行永田正道に問い合わせを行っている。勘定奉行の「五六歳にても足坏も汚不申敷、又步行等其外他より参り候様子も無之候ハ、捨子之取計にも相成候哉」との問い合わせに対し、町奉行は、三歳位の子供であっても虚弱のため歩行ができず、一見すると捨子との判別が難しい子供もいることを認めている。⁽¹¹⁾その上で、まずは「菅人立」できるかどうかで見極めることを指示している。つまり、迷子の基準は、三歳という年齢と一人で立って歩けることにあったと言える。しかし、迷子保護の現場では、この二つの基準だけでは判断できない場合も多く、実際には、子供を保護した町側の判断に委ねられる部分が多かった。

また、迷子は出生地が不明であるため、人別帳の記載においても問題になることがあった。天保一四年（一八四三）五月、市中の人別取調にあたり、人別取調掛名主は町奉行所に迷子の出生地および貫人の決まっていな迷子の人別について尋ねている。⁽¹²⁾町奉行は、出生地については不明の旨を記入し、貫人の決まっていな迷子は「訴人」の家主・家族の末尾に記すよう指示した。これに対し町側は、「生国不相分段相記シ置可申旨御下知御座候得共、

右体人別帳江認置候得は、右捨子・迷子之者名目相顕レ居、成長之上家督相統致候歟、又は養子等ニ罷成候節も、其者身分ニ付差支候義も可有之哉、何共歎敷奉存候、一体捨子・迷子は他国者ニは有之間敷、御当地其外近在之者ニ可有之哉ニ奉存候間、御当地出生と認置申度旨奉伺候義ニ御座候」と述べ、出生地不明と記入すると、迷子が後に家督を相続したり、養子に迎え入れられるときに支障をきたすとし、概ね迷子は江戸およびその周辺農村の生まれと考えられるため、「御当地出生」とするのが妥当であると主張した。⁽¹³⁾しかし、この主張は町奉行には認められず、迷子は人別帳に「出生国不分」と記入されることになった。町方が迷子の将来を案じたのに対し、町奉行はあくまでも「御当地出生」は推量に過ぎないとして身分的な混乱を避けようとしたのである。幕府は身分取締りの立場から属地主義をとり、出生地の明確化が「身元宜敷者」の指標と考えていた。しかし、町方では、捨子や迷子は江戸から離れた場所からやってきたとは考えづらいため、後の混乱を妨ぐ意味でも「当国出生」とする必要があったのである。

(2) 町触に見る迷子の保護

では、次に江戸の町における迷子の保護の実態について町触等から見ていきたい。迷子の保護は基本的には捨子のそれと同様であるとされてきた。迷子の保護に関する町触は、管見の限りでは、享保十一年（一七二六）二月の触が初発である。

覚⁽¹⁴⁾

倒死病人水死、其外異死迷ひ子等有之節、其所より訴出次第、年頃并衣服等之品認、自今芝口町河岸二七日之内札を建置候条、心当有之者ハ右札場江罷越、文言見候而、其親類由緒之者ニ而、病人或ハ死骸引取度と存候者、又ハ怪敷儀も有之、吟味願度存候者ハ、札建置候奉行所江可訴出候

右之趣町中可触知者也

二月

この触書では、迷子が発見された場合には、子供の年齢・服装等を認めた立札を七日間芝口町河岸に建てて広く知らしめることを命じている。立札を見て親類・縁類の者が見つかった場合、あるいは不審な点がある場合は町奉行所に届け出ることが義務づけられた。その後、明和七年（一七七〇）には、迷子を発見し、奉行所に届け出た町に養育の義務があり、貫人が決まった場合には届け出ることが決められた。慶応四年（一八六八）三月には、迷子が発見された場合には、まず一〇日間子供の親・縁者を探し、見つからなかった場合には、捨子と同様に養父母を見つけることが命じられた。さらに、養父母に貰われた場合でも、子供が一〇歳未満で死亡した際の届け出を義務づけた。⁽¹⁶⁾

また、迷子の詳細な情報が町触で町中に知らされることもあった。

宝暦一三年（一七六三）二月、遠州浜松から奉公のため江戸に出てきた甚助という子供の事例を見てみよう。⁽¹⁶⁾ 甚助は奉公先である小田原町の薬種屋が見つからず迷子になっていたのだが、町触では甚助の奉公先である薬種屋次郎兵衛を見つけた場合は、奉行所へ知らせるよう命じている。その後の状況は不明であるが、町奉行所がこの一件に、架空の奉公先の紹介といった、何らかの事件性があると見ていたことが推測される。

迷子の保護に関する町触の初発が享保期であることは、当該期に捨子の保護・対処に関する法的な整備がほぼ整ったことと無関係ではないであろう。貞享四年（一六八七）に捨子の保護が命じられてから、捨子そのものを抑制するための法令が出され、さらには、養父母を監視し子供の成長を見守る仕組みがつくられた。享保一九年（一七三四）に、一旦、養父母が決定した子供を別の養父母に引き渡すことを禁じたことや、一〇歳未満で死亡した場合は役所に届け出て検使をうけることを決めたのもその一例である。これらの法令は、養育金目当てに子供を養子にする親

を取り縮まろうとしたものである。こうした捨子の保護や対処が制度化された結果、迷子にも適用されることになったのである。また、『普救類方』の刊行や小石川養生所の設置といった江戸幕府の一連の公共政策も影響あったと考えられる。^[7]

(2) 迷子保護の実態

迷子は発見され次第、芝口町河岸に立札を立てて両親や縁者を捜すことになっていたが、実際には、町々はどのように対処していたのであろうか。この点について「記事条例」からいくつかの事例を紹介する。『記事条例』とは町奉行所の「言上帳」の記載を項目ごとに分類してまとめ直したものである。

① 西河岸町一石橋の迷子の事例^[8]

一 西河岸町月行事幸七申上候、町内一石橋之上二三歳位ニ相見候男子、青梅嶋布子下ニ木綿同、下ニ同襦袢を着致し迷罷在候を今昼時見出候ニ付、名住所相尋候得共相分不申候ニ付、則召連此段御月番能登守殿御番所江御訴上候得ハ大切ニ養育致置、尋来候者も有之候ハ、御訴可申上旨被仰渡候、為御訴申上候由、右之幸七五人組権兵衛・名主清右衛門煩ニ付代権四郎申来候

寛政八年（一七九六）四月、西河岸町月行事幸七は、町内の一石橋上で三歳位の男子を見つけ町奉行所に届けた。町奉行は、幸七方で男子を養育し、両親・縁者が申し出てきた場合は再度、届け出るように指示した。その後、迷子の親と名乗る清七という人物が男子を引き取りに西河岸町に現れた。この人物は寛政八年三月まで木挽町三丁目の長屋に住んでいたが、普請のために立ち退くことになり、その後、妻とも離縁し無宿であった。幸七はさっそく清七が男子を引き取る旨を奉行所に届け出たが、奉行所は、無宿では子供の養育は困難であると判断し、清七の居所が決まるまで、男子は西河岸町内で養育するよう命じた。西河岸町では男子の養育が困難になったためか、呉

服町吉右衛門店に居住する半兵衛という人物に男子を預けた。その後、男子は病を得て、寛政九年（一七九七）正月に死亡している。

この事例から、迷子は捨子と同様に引取人が見つかるまでは町で養育されていたことがわかる。さらに親が名乗り出た際も、子供をすぐに引き渡すのではなく、親の養育能力を見極めている点も注目される。しかし、こうした町奉行所の対応は、町方に余分な負担を強いることになり、町側が子供を他所に預けざるをえなくなった結果、その子供を死に至らしめてしまうことも少なくなかった。ここに迷子保護の矛盾点を見いだせる。

「記事条例」の事例を見る限り、迷子を保護した町は、すぐに町奉行所に届け出るとともに、子供の両親・縁者探しを積極的に行っていた。しかし、縁者が見つからなかった場合には養父母を探し子供を引き渡していた。以下は、その一例である。

②新吉原町の迷子の事例¹⁹⁾

一新吉原京町壱丁目月行事又七申上候、町内往還ニ迷ひ小女罷在候を当月廿日夜九ツ時過見出候ニ付名住所承候処、当拾貳歳ニ而かね与申候由、父者上州桐生四丁目池之端与申所之百姓ニ而、母者かつ与申候処、子細不存身上仕舞御当地江出候よし、当才之首次郎与申男子とも四人連ニ而当月十八日在所を罷出、私其町内灯笼見物ニ参り両親を見失ひ候由、尤南鐐銀二斤・一朱銀二斤・真鍮錢三十九文所持罷在候為訴出候由、右之又七五人組孫七・名主六右衛門煩ニ付代九八申来ニ付、右迷子養育致置、尋来候もの有之歟、貫人も有之候ハ、可訴出旨可申付

右の史料は天保三年（一八三二）七月二十日、新吉原京町一丁目で見つかった迷子の届である。迷子のかねといふ一二歳の女子で、上野国桐生から家族とともに江戸へ出てきて、新吉原町で灯笼を見物していたところ、家族とはぐれてしまった。発見時にかねが南鐐銀二斤・一朱銀二斤・真鍮錢三十九文という子供にしては大金を所持してい

たため、すぐに町奉行所に届けられたと思われる。町奉行は、子供の両親が見つかるか、養父母が決まるまで同町で養育することを命じた。かねは家族が見つからなかったため、浅草田町店借熊次郎に養女として貰い請けられることになった。しかし、翌四年正月一六日、かねは、熊次郎と外出した際、またも行方不明になってしまった。

この事例では、迷子を養父母に引き渡した後も、死亡・行方不明になった時は町奉行所に届け出る必要があったことを示す。かねは、すでに一〇歳を過ぎてはいたが、養父母に引き取られた後も一〇歳になるまで、死亡・行方不明・奉公・転居を届け出なければならないという捨子の措置に準じたものと考えられる。

また、「記事条例」には、迷子の縁者探しが町側にとってかなりの負担になっていたことを示す事例が記されている。寛延四年（一七五二）九月朔日に赤坂裏伝馬町で保護された八歳位の小比丘尼は、発見時に早稲田町店借与八方に居住していると話した。このため、町側では小比丘尼を早稲田町に連れていくが、与八なる人物は存在せず、その後、市ヶ谷辺りまで探し歩くことになった。⁽⁹⁰⁾ 町方にとって縁者探しは容易なことではなく、町入用の増加に加え手間もかかったのである。享保十一年（一七二五）、町名主たちは捨子を減らす方法として非人身分に編入することを提案しているが、これも、町側にとって負担が深刻化している状況を反映している。

その一方で、町人たちの中には捨子や迷子の保護は当然であるという意識も定着しつつあった。江戸幕府右筆である屋代弘賢が記した「弘賢随筆」に「捨子を頓知にて取扱しものゝ事」と題する話がある。⁽⁹¹⁾ この話は、主人の留守中に、家人が屋敷前に捨てられた生後七・八か月の子供を拾い上げるところから始まる。家に帰った主人は子供を見るなり井戸に捨ててくるように命じるが、子供を憐れに思う家人は思わず、大石を井戸に投げ入れその場をおさめようとした。しかし、その一部始終を見ていた女性が主人を責め立てたため、主人はやむなく養育金を出して養父母に子供を預けることになったのである。のちに、私財を出して捨子を救った主人の行為は「陰徳」として賞賛されることになるのだが、この時、主人は「しかはいやさにハあらず、表向になりても其所の物人なり、しか

るにかくせしかハよほと物入ハ減したりし」と述べている。つまり、捨子を届け出て町に余計な迷惑をかけないように自分が負担したというのである。この主人の対応は、捨子の保護は町入用を圧迫し町の負担になるという家持層の考えを如実に示している。これに対して、井戸に石を投げ入れた家人や主人を非難した女性の存在は、捨子は保護すべきだという意識が広く社会に定着した証左と言える。

二、迷子石の建立

安政四年（一八五七）、西河岸町の町人重兵衛らの申出により、一石橋に迷子石が建立された。迷子石は、迷子を保護した側と迷子を探している側との情報を同時に揭示し、迷子の親類縁者を効率よく捜し出すために考案されたものである。以下ではその経緯を追ってみたい。

（1）一石橋迷子石建立の経緯

「旧幕府引継書 市中取締統類集」に一石橋の迷子石建立に関する以下の史料が収録されている。⁽²²⁾

乍恐以書付奉願上候

一西河岸町家主拾七人惣代重兵衛・喜八・伝兵衛右三人奉申上候、湯島天神境内ニ迷子しるへ之為建石補理有之候ニ相效、今般私共町内最寄一石橋橋台補理、尤地面より石高サ六尺程幅壹尺位、台石厚サ壹尺余幅貳尺位ニ致、石面同左リたつぬるかた^ヲ彫付候方江者迷子之名前・町銘とも委敷認メ張置、同右しらする方^ヲ彫付候方江者、迷子留置候町内より其所之町銘并其子之名前・年頃・面体・恰好・衣類其外共同様相認メ張置候得者、私共一同申合精々心付、右張紙に符合致候者有之候節者、早速元町江為相知厚ク世話仕候ハ、速ニ相分り可申^ヲ奉存候に付、別紙絵図面之通り自分入用^ヲ以補理申度、此段御聞濟ニも相成候得者、南北小

口年番名主江兼而被仰渡被成下置候ハ、往々迷子相尋候一助ニも可相成哉与乍恐奉存候、何卒以御慈悲御聞濟被成下置候様偏ニ奉願上候、以上

安政二辰年九月

西河岸町

家主拾七人惣代

願人 重兵衛印

同 喜八印

同 伝兵衛印

同 清左衛門印

御番所様

西河岸町（現中央区日本橋）家主惣代重兵衛らが建立を計画した迷子石とは、高さ六尺（一八〇センチ）、幅二尺（六〇センチ）ほどの柱石で、一石橋橋台西側に建立予定であった。石柱の正面に朱文字で「まよひ子のしるへ」と刻み、両側面にそれぞれ「しらするかた」・「たずねるかた」と彫りつけた。「しらするかた」の方には、迷子を預かった町側が子供の名前、年格好、衣類、容姿の特徴を書いた紙を張り付け、「たずねるかた」には迷子を探す側が、子供の特徴など書いた紙を張り付けた。それを時々、西河岸町の町人が見廻り、両者の条件が合う場合に双方に連絡し確認するというものだった。

西河岸町は、日本橋から一石橋に至る細長い区域で、日本橋沿いの船着き場には土蔵が多く建ち並び、一石橋のほかに西河岸橋等の橋も架かっていた。物流の拠点という立地条件は、迷子石設置に適した場所だったと言える。重兵衛たちは、迷子石建立の契機として、湯島天神境内の迷子石をあげている。町奉行所では、これをうけて湯

島天神別当喜見院および門前町に迷子石設置の経緯を尋ねている。それによると、そもそも湯島天神境内にある迷子石は、北野天満宮にある「奇縁氷人石」を模したもので、天保三年（一八三二）に境内で出開帳を執行したときに信者から奉納されたものであった。開帳後、喜見院の庭に置かれていたが、嘉永三年（一八五〇）に信者から神社の瑞籬外へ設置するようお願いが出がかったことから、寺社奉行の許可を得て現在地に置かれるに至った。

重兵衛等の申し出はすぐには許可されず、その後、安政三年（一八五六）八月・安政四年（一八五七）正月にも同様の出願をし、ようやく安政四年三月に許可された。重兵衛たちはすぐに迷子石の建立をはじめ、完成後は、町奉行所役人の見分が行われた。町奉行所がすぐに許可しなかった理由については明確な記述はないが、後の小伝馬町の迷子石建立から推測するに、重兵衛らの身元調査と町方の負担になるかどうかの見極めに時間を要したと推測される。

この願いは重兵衛・喜兵衛・伝右衛門の発案であったが、家主一七人惣代として出願している点が注目される。家主層の町政が一般化するにともない、こうした問題も家主層に委ねられていったのである。

（2）迷子石の広がり

迷子石は、その後、幕末維新期には江戸の各地に建立されていた。その要因には、迷子石に迷子を探す人と預かっている人との双方の情報を掲示するという手法が非常に便利だと思われたことがある。迷子石は万延元年（一八六〇）には小伝馬町にも設けられた。以下はその経緯を示す史料である。

乍恐書付ヲ以御訴奉申上候

一小伝馬町三丁目喜右衛門地借与吉奉申上候、私儀水茶屋渡世仕候處、迷子之儀二付去ル巳年中西河岸町より御願濟ニ而同所一石橋際江棹石相建有之、尋候もの弁利ニ相成候處、私家前之儀も諸人通行弁利之場ニ而迷

子等有之節、尋參候もの御座候ニ付、迷子為相知候棹石相建候得者諸人助ニ茂相成可申与奉存候間、私家前雨落下水際江棹石新規相建申度段、尤棹石高サ五尺五寸、巾壺尺式寸四方、根請石高サ壺尺巾式尺三寸四方ニ仕付申度、町内并隣町承合候処、差障も無御座候間、別紙絵図面相添、此段願上候、以上

万延元年八月十六日

小伝馬町三丁目

喜右衛門地借

訴訟人 与

吉印

(他四名略)

町番所様

右の史料は万延元年（一八六〇）八月一六日、小伝馬町三丁目水茶屋渡世与吉ほか四名の者が町奉行所に迷子石の建立を願ひ出たものである。与吉は、この経緯について西河岸町の迷子石が便利であること、出願者である与吉のもとに迷子の問い合わせが多いことを上げている。

町奉行所内部では、与吉の出願をうけて西河岸町一石橋の迷子石設立の経緯を確認すると同時に、世話掛名主に命じて、与吉の人物評価と自力で石標を建てるのか否かを調べさせた。世話掛名主が提出した調書には、「右与吉義者当御組御廻り方手先御用相勤、水茶屋渡世いたし、仮成相暮候得共、同人自力ニ而取候儀二者無之、小伝馬町・馬喰町者旅人宿多く旅人同道之幼年もの等堂社参詣人込之場所ニ而見失ひ、御当地不案内之もの親子共深く心配いたし候義間々有之候ニ付、小伝馬町・馬喰町四ヶ町住居之旅人宿申合出錢いたし補理候積り」と記されている。これによると、与吉は人通りの多い場所得水茶屋を経営していることから、町奉行所の廻方同心の御用も勤めていた。地方から寺社参詣等で江戸へやってくる旅人の往来が激しい小伝馬町周辺では、当然ながら迷子も多かった。与吉は、個人ではなく小伝馬町・馬喰町の旅人宿と協力して迷子石を建立することを計画していた。これは、旅人宿の

広告を兼ねた行為とも言えようが、迷子問題を一町単位ではなく、同業者組合あるいは周辺数町が協力して解決する仕組みを作り出したとも考えられよう。迷子の親・縁類探しには、町役人だけでなく、人の出入りの多い水茶屋や旅人宿の情報が欠かせなかったのである。与吉の店は、四つ角に面した道幅の最も広いところにあったため、立地条件からも石碑を建立に適していた。しかし、与吉の願いはすぐに認められず万延元年（一八六〇）十月十九日に再度、奉行所に願書を提出し、ようやく許可された。

町奉行は、なぜ、すぐに許可しなかったのだろうか。町奉行所が迷子石の建立にあたり対処に慎重になったのは、与吉の人物像の評価と費用を町に負担させることになるか否かを問題にしたからである。そこには、迷子保護に対する根本的な対処方法を見い出そうとする姿勢はみられない。町奉行は、町入用を圧迫することなく、旅籠屋や水茶屋の出資によって迷子石が建てられることが判明すると許可したのである。町奉行としては、町役人層に負担をかけることは許可できなかったであろう。

迷子石は、万延元年（一八六〇）三月には浅草観音境内に、明治三年（一八七〇）閏十月には赤羽根橋、明治六年（一八七三）二月には両国橋西畔、明治七年（一八七四）三月には万世橋に、いずれも町人の出願によって建てられた。明治八年版『東京一覽』によれば、府内には湯島社内・一石橋・浅草寺中・赤羽根橋畔・西両国橋畔・万世橋畔の六か所に迷子石が建てられていた。東京府は明治七年七月、迷子の届け方について、芝口・浅草・湯島・一石橋の迷子石への張札だけではなく各区の掲示板への張り出しを命じた。明治一四年（一八八一）には、棄児・迷子の届出は所轄警察署・最寄巡查屯所に届け出ることが定められた。近代警察組織の整備に伴い、迷子の対処も警察の職務になるが、それでも迷子石を利用した情報提供と親類・縁者探しは明治一〇年代前半まで続いた。そして、これを支えたのは町入用に依拠しない町人たちの出資であった。

では、町人たちは、なぜ、迷子保護に尽力したのであろうか。以下では彼らの心性について考えてみたい。

(3) 迷子保護にみる公共性の成立

西河岸町重兵衛らが一石橋に迷子石を建てようと町奉行に出願した際、町奉行所では定廻りが重兵衛・喜八・伝兵衛の身元調査を行った。この時、定廻りが作成した調書をもとに、重兵衛らが迷子石建立にいたった経緯をたどつてみよう。⁽²⁵⁾

右三人之者重立、今般迷ひ子しるへ建石願筋目論見候起り者、右町内地先御堀内并一石橋川筋江年々夏氣ニ相成候得者、大人子供打交り水遊致し折々水死致し候ものは迄数多有之、近辺之者共相歎罷在候由、然処右三人之者共者相州小田原道了権現信心ニ而、武州在代々木村百姓之倅金五郎与申道了信心之者有之祈祷等杯致し候間、右金五郎古来水死人有之節者其場所川中ニ而祈祷致し貫候而者如何可有之哉与存、身外家主共江も打合段々様子承候処、供物其外法要修候ニ者三四日も相掛、外見ニ者大行之様ニも可有之哉、殊ニ御曲輪近辺之場所ニ而右体祈祷修行致し候も如何ニ付深く勘弁可致旨、外家主共より重兵衛外二人之者江申聞候処、尤之儀ニ付右三人之者共右目論見者相止、其儘打過候由之処、無間も去々寅年中水遊之棒杭願濟ニ而相建西河岸町家主共一同悦罷在、今般之願人重兵衛外二人之者共儀も元来水死人有之節祈祷可致旨存付、種々心配も致し候処、前書之通棒杭願濟ニ而出来、川江這入候もの無之之上者兼而之願意届候様ニ者候へ共、一体棒杭相立候義者小網町町役人共之発意ニ而最寄町々申合願濟相成、水死人祈祷より棒杭相建候方同意之者多く有之候間、内実者重兵衛外二人之目論見空敷相成候に付、此上世上之一助ニも可相成儀者湯島天神境内ニ有之候様成迷子しるへ建石補理度段、右三人之者より外家主共江及相談候

右の史料によれば、重兵衛ら三人は迷子石建立を計画する以前に、水難者の供養を執行しようとしていたという。一石橋辺りでは夏期になると水遊びで賑わい、時には水死する者もいた。重兵衛らは小田原道了尊を信心していたことから、同じ信者である上代々木村金五郎という人物を頼んで供養の祈祷を行うことを計画したが、法要には

三・四日かかることや西河岸町が御曲輪近辺であるという理由で家主たちの同意を得ることができなかったのである。その後、安政元年（一八五四）に至って小網町の者たちが遊泳禁止の棒杭を建立し、これによって水死人も減少した。このことは重兵衛たちにとっても喜ばしいことではあったが、自分たちの力で実現できなかったのは残念なことでもあった。そこで、湯島天神で見た迷子石を同地に建立しようとしたのである。さっそく重兵衛らは町内の家主達に迷子石の建立を呼びかけ、「諸人用之義は勿論、地主江も出銀不為致、町内家主共之内相応之もの申合出銀致し相建、尤家主共之内志有之候ても出銀致し兼候身薄之者は出銀不致俱々骨折世話致し」と述べている。迷子石の建立にあたり、地主層の力を借りず、家主のなかで経済的に余裕のある者が出金することとし、経済的に困難なものには種々世話をすることで協力するよう呼びかけたのである。ここで注目すべきは、町入用の負担者である地主層に頼らずに建立を成し遂げたことである。地主層は町入用の増加という点で捨子や迷子の保護に全面的に賛同しているわけではなく、町奉行所もこうした地主層の意向は無視し得なかったと思われる。これに対して自力で迷子保護に貢献しようとした家主層の動向には、寛政期以降、町の公共性の体现者としての家主層が迷子や捨子といった社会的弱者救済の担い手になっていったことが看取できる。

おわりに

以上、限られた史料を通して、迷子の保護の実態について述べてきた。江戸幕府が迷子の保護について明確に命じたのは享保十一年（一七二六）で、その時に定められた迷子の対処は、芝口町河岸に立札を建て迷子の親類・縁者を探し出すというものであった。そして、迷子の親類・縁者があらわれるまで、あるいは養父母が見つかるまでの養育は町の義務になった。これは基本的には、捨子の対処と同様で町入用を圧迫する原因でもあった。そこで、迷子の親類・縁者を早く探し出す方法として考案されたのが迷子石の建立だったのである。

迷子石の建立を出願したのは、主として家主層で、石は人通りの多い橋の近くに設置された。迷子石を用いた迷子情報の伝達は好評で、幕末維新期には八基程の迷子石が建てられた。迷子石の発案者は一石橋の場合が家主層、小伝馬町の場合は水茶屋渡世の与吉を中心にした旅人宿渡世たちであった。しかも発起人の与吉は地借である。

迷子は捨子と同様、近世半ば以降、都市問題化していた。幕府が命じた迷子保護を各町で担っていたのは町名主であり、地主層であったことは間違いない。しかし、幕府の保護政策では解決しえない部分に目をつけたのは、地主層ではなく、家主・地借層であった。彼らの斬新なアイデアは当初、幕府に認められなかったが、繰り返し願い出ることによって実現にいたった。実現にあたり問題になったのが、費用の問題であり、自らが負担することで許可された。町奉行は、町名主・地主層の負担になることを避けると同時に、町人たちの申し出が犯罪に繋がらないかを吟味していた。ここに、救済に対する両者の意識の差異が存在する。近世中期以降、家主層が町運営の中心になっていく過程で、窮民保護の一部分を担う存在になっていたことが看取できる。元禄期の生類憐み令を契機に、社会的弱者救済の思想が定着し、寛政改革を経て、それを具体的に実践する者が現れるようになった。それは大商人による施行活動とは異なる、家主層の社会倫理に基づく救済活動であり、それこそが江戸の町における社会的弱者の救済を支えていたのである。

註

- (1) 塚本学『生類をめぐる政治』（平凡社、一九八三年）。
- (2) 迷子の保護に関する先駆的な研究として、京都の町を分析した菅原憲二「近世京都の町と捨子」、『歴史評論』第四二二号、一九八五年）がある。江戸の迷子保護については沢山美果子『江戸の捨子』（吉川弘文館）、大坂の事例を分析したものに海原亮「都市大坂の捨子養育仕法」、『住友史料館報』第四〇号、二〇〇九年）がある。沢山氏は子供を捨てる側の論理に

注目して分析を行っており、海老原氏は大坂における迷子の取り扱いの実態を詳細に実証した。このほか拙稿「江戸の捨子」『都市紀要四〇 続レファレンスの杜』東京都公文書館、二〇〇九年、加藤友梨「江戸の捨子問題―貞享期から享保期までを中心に―」『文化学研究』第一九号、二〇一〇年等がある。

- (3) 西山松之助『西山松之助著作集』第3巻 江戸の生活文化（吉川弘文館、一九八三年）四一―四二三頁。川崎房五郎『新版江戸八百八町』（光風社出版、一九八三年）二五三―二六三頁。

- (4) 斎藤純「迷子しるべ石について」『風俗』二六―一、一九九一年、同「迷子しるべ石について」（『民具マンスリー』二四―九、一九八七年）、同「迷子しるべ石について―類例と資料―」（兵庫県立歴史博物館紀要『塵界』四、一九九一年）、同「再考・迷子しるべ石」（三三―六、二〇〇〇年）。

- (5) 吉田伸之『近世巨大都市の社会構造』（東京大学出版会、一九九一年）。

- (6) 寛政期以降、竹垣代官所・寺西代官所をはじめ各藩において、農村政策の一環として小児養育への取り組みがなされてきた。こうした代官の子育仕法については、菅野則子『村と改革』（三省堂、一九九二年）、藤田覚『松平定信』（中公新書、一九九三年）がある。このほか諸藩の小児養育政策として水野恵子「佐倉藩の小児養育政策」（『日本女子体育大学紀要』一三、一九九三年）等がある。名主の困窮者救済活動・子育てを論じたものとして拙稿「天保の飢饉における名主の救済活動」（森安彦編『地域社会の展開と幕藩制社会』名著出版、二〇〇五年）、「子どもと村社会」（『多摩の近世・近代史』（中央大学出版部、二〇一二年）がある。

- (7) 東島誠『つながりの精神史』（講談社現代新書、二〇一二年）、上安祥子『経世論の近世』（青木書店、二〇〇五年）。

- (8) 近世史料研究会編『江戸町触集成』第四巻（塙書房、一九九五年）二四四頁。

- (9) 『徳川民事慣例集』第一巻（橘書院、一九八六年）一二〇頁。

- (10) 近世史料研究会『江戸町触集成』第一九巻（塙書房、二〇〇三年）一三七―一四五頁。

- (11) 近世史料研究会編『江戸町触集成』第四巻（塙書房、第四巻、一九九五年）二四四頁。

(15) 註(12)三二頁。

(16) 近世史料研究会編『江戸町触集成』第六卷（塙書房、一九九六年）二四二頁。

(17) 註(1)に同じ。

(18) 「旧幕府引継書 記事条例」六一 捨子迷子訴之部（国立国会図書館所蔵）。

(19) 「旧幕府引継書 記事条例」六三 捨子迷子訴之部（国立国会図書館所蔵）。

(20) 「旧幕府引継書 記事条例」六一 捨子迷子訴之部（国立国会図書館所蔵）。

(21) 「弘賢随筆」（国立公文書館所蔵）。

(22) 「旧幕府引継書 市中取締統類集」地所之部六ノ上（国立国会図書館所蔵）。

(23) 「旧幕府引継書 市中取締統類集」町人諸願之部四ノ下（国立国会図書館所蔵）。

(24) 天保年間に小伝馬町以外での旅人宿を規制する町触が出されており、旅籠屋の経営をめぐるでは他町との対立もあったと思われる。

(25) 註(22)に同じ。

（いわはし きよみ 本学非常勤講師）